
ご注文は？～魔法使いで！～ シーズン2

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ご注文は？〜魔法使いで！〜 シーズン2

【Nコード】

N8293C

【作者名】

雨月

【あらすじ】

魔法がひそかにはやっていた世界。魔法を使えるようになった零時と零時の師匠の話！今回はセレネの妹、『古代魔法振興会』の人物も登場！

（前書き）

以前短編で出した小説の続きです。以前は感想などが多ければ連載をするといつていましたが、今回は感想などが多かった場合は続きを短編のほうで書きたいと思います。

二、

俺の名前は剣山零時だ。つるぎやまれいじ 高校二年生・・・半年ほど前に魔法使いとなり、魔法使いには二種類いることを知った。そして、半人前という名目上、俺には師匠がいる。

「零時、今日も特訓よ！」

「へへへ」

今日も月が出ている下で俺たち二人は近所の公園、対峙していたのだった。お互いに腕には魔力の結晶の剣を作り出している。

先ほども述べたとおり、魔法には二種類あるらしい。

一つ目は普通の魔法。

とくにこれには名前など使われておらず、二種類目の古代魔法よりも扱いが簡単で使用者の精神状態などで威力が変わるらしい。

欠点としては一つの魔法を使用しているときはほかの事に意識がなかなか向けることが出来ないということだそう。

そして二つ目、俺が使うことが出来るのが古代魔法。

これはかなり前に使用者が死んでしまっており、これは絶えたらしいのだが最近、それを遣うことが出来るものたちが少数ながら、いるそう。

いわば絶滅危惧種に位置づけられているといっている。古代魔法は普通の魔法よりも扱いが難しく、精神状態よりも元からの素質でその威力が変わってしまうらしいのだが、何かをすればその威力が上がるそう。

さて、説明はこのくらいにして集中しないと・・・

「でやあああああ！！」

元氣よく俺の胸を薙ごうとしてくる相手に対して俺は足にまるで天使の羽が生えたかのように飛び退る。

「逃げてばっかじゃ勝てないわよ！」

燃えるような瞳を俺に向けながら俺の師匠……セレネ・ルーナは

出していた魔力を消してすぐに左手で威力の高い火の玉を俺に飛ばしてくる。

「く、勝つも何も決闘じゃないんだから・・・」

俺は飛んできた火の玉を水の剣で切り落としてさらに間合いを広げる。遠距離の魔法を使用しない俺にとっては少々、つらい間合いではあるが、これは相手であるセレネもそうである。大体、セレネの指導の下で半年間練習をつんできた割には伸びていくのは近距離戦、増えていくのは擦り傷きり傷である。そろそろ遠距離の攻撃魔法を使用したいものだなあ・・・

「ほら、ぼさつとしてると隙を突かれるわよ！」

普通の魔法使いであるセレネは一つの魔法しか使用できないのだが、いかんせん、彼女の師匠である人物からは

「セレネ自身もコントロールが出来ていない！」との指摘をもらっており、飛んでくる火の玉の大きさは日によって変わる。ちなみに今日の大きさは・・・

「きよ、今日は何かいいいことでもあったのかな？」

俺の大きさの二倍ぐらいはある大きなものになっていた。

「真面目にしない弟子にお仕置きよ！」

にやりと笑うセレネに俺は白旗の準備をしようとして・・・

「ぎゃああああああああああ！！」

「あゝあ、髪の毛がこげちゃった・・・」

月が見える自室から俺は月を眺めていた。月はいいいえ・・・心が洗われるようだ。見ているだけで飽きないし、きつと月ではウサギたちが餅つきを飽きもせず毎日毎日やっているにちがいない。

きつと、地球のウサギとは違って前足で餅をついているはずだから・・・マツチヨなウサギに進化するんだろうなあ・・・

「零時、いつまでばあゝつとしてるのよ？休憩時間はとづくに終わってるわよ？さつきから手が進んでないわ！」

「はいはい・・・」

月を見ていた俺の横からセレネが顔を突き出して来る。体を動かした後に頭を動かすのは少々おいたが過ぎると思うのだが、師匠の言うことは絶対なので反対は禁止なのである。

「きちんとやっておかないといざって時に役に立たないわ!」

「わかってますって・・・」

いましているのは魔法についてのお勉強・・・ではなく、普通に高校の勉強をしている。半年間の間に俺はセレネのほうがテストの点数がいいことを知り、これは教えてもらえば俺もいい点をとることが出来るに違いないと思って教えをこいたのだ。だから、普段は機械の絵をかいている時間を少々割いて勉強を教えてもらっている。

いつもと同じように今日も終わると思ったのだが・・・

「・・・零時、今度の日曜日ちよつと会ってもらいたい人がいるんだけど・・・大丈夫?」

唐突にそんなことをセレネが尋ねてきたので俺は首をかしげたのだった。

「日曜日? ああ、大丈夫だと思うけど? 母さんだって何もいってなかっただろ?」

「・・・それなら日曜日のお昼に駅前に行ってくれないかな? 私、その日ちよつと用事があつて・・・」

非常に浮かない顔をしている。しかし、それを見せまいと努力をしているらしく、その顔には苦渋の色がにじみ出てきている。そして、顔には

「うう、また師匠に呼び出されちゃった・・・死んだらどうなるのかしら?」という疑問が書かれていたのだった。

「はあ、またあの人からのお呼び出しか・・・骨は拾ってやるからがんばれよ!」

「そ、そんなあ・・・わかったんなら何か慰めの言葉をかけてよ!」

「・・・墓は大理石と花崗岩、どっちがいい? ああ、花崗岩つてのは白と黒の・・・」

「し、死なないから大丈夫よ！ちよつとお皿を割っただけ！」

セレネと俺は同じ場所でバイトをしている。三人で一組の班分け制なのだが、この前俺が熱を出してしまったときにセレネは何かをしでかしてきたらしい……

「何枚割った？」

俺の予想では十七枚ほどかと思ったのだが……

「さ、三十枚ぐらいかな？」

「それってちよつとか？お前のちよつとは三十か？俺のちよつとは一枚か二枚だぞ？お前は『ガムちよつとちようだい』といったら三十枚ももらうのか？」

俺がそういうとセレネは顔を真っ赤にして反論してきたのだった。

「う、うるさいわね！誰のせいでお皿を割ったと思ってるのよ！」

「俺？俺がお前に『皿を割れ！皿を割れ！』というようなテレパシ―でも送ったと思ってるのか？皿の処理をいつもしてるのは俺だぞ、俺。心配こそすれ、お前に皿を割って欲しいとは思ってないぞ」

「違うわよ！私は熱を出してた零時が心配だっただけ！あくもうつ！気分が悪いから私はもう寝るわ！」

一気に捲し上げたあと、俺のベッドに入り込んでそのままいびきをかき始めたのだった。驚愕している俺は目を何度かぱちやつた後に恥ずかしいような感じに陥って部屋を後にしようとしたのだった。

「……零時のバカ！」

扉を閉めるとき、そんなセレネの寝言が聞こえてきたのだった。

「……すまん、セレネ」

俺は寝ているセレネにそういつとさつさとその部屋から逃げ出したのだった。

言付けられたとおり、日曜日俺は昼時に駅前の『桃の銅像』の前に立っていたのだった。

結局、あの日の次の日からセレネは出かけたままであり、相当セレ

ネの師匠であるそる師匠にお叱りをつけているようだ。まあ、そんなことよりきちんとあたりを見てやら無いと・・・今、辺りではカップルたちがどこかに言ったりしている光景が目映っている。俺は暇だったのでねじを取り出すとそれを手の中で転がし始めた。なんだか変な人物が先ほどから視界の端に映っているのがうつとうしいな・・・

ねじをいじり始めて約一時間・・・俺の手にねじの跡がしっかりと残った時間ぐらいに一人の女の子が俺に話しかけてきたのだった。あの、すみません・・・」

そちらのほうを見ると巨大なねじが立っていた。

「！」

いや、よくよく見ればそれはねじを両手でふうふう言いながら持っている女の子だった。銀髪に目は青い。外国人さんのようなのだが、流暢な日本語を話しているところを見ると意外と日本にいる日が長いかもしれない。

「・・・おかしいですね、姉さんは『ねじを見たらうれしそうな顔をする人』っていつてたんですけど・・・」

小首をかしげている相手に俺は少々

「ああ、まだ残暑が残ってるから頭をやられたのかな？」と思いながら話しかけたのだった。

「・・・あの、俺に何か用があるんじゃないのか？」

「ああ、そうでした！実は、人を探していてですね・・・機械好きでお兄さんのような髪形をしていて調子に乗ると付け上がるような人物を知りませんか？名前は剣山零時って言うそうです。ええと・・・このように・・・」

そういつてねじをあっという間に消して俺のど元に魔法の剣を突きつける。

「・・・魔法を使うことが出来るそうなんです・・・」

「・・・あんたがセレネが待つはずだった招待客か・・・剣山零時って言うのは俺だよ」

俺は両手を上げて降参のポーズをとって相手に名乗る。こいつは
すげえ・・・犯罪者だ！くしゃみをしたらあつという間にお陀仏
だ・・・

「よかった、すぐに見つかった・・・」

「でもよ、あんたがくるはずだったのは一時間ほど前だったじゃないのか？俺はセレネにそういわれたぞ？次の電車だつて後五分後にこの駅につくし・・・」

「ええ、私も一時間ほど前から探してました・・・自己紹介が遅れましたね、私の名前はセレン・ルーナっています。あなたのお世話になっっているセレネ・ルーナの妹です。よろしく願いますね」
差し出された右腕を俺は掴むことなく、その場から離れた。

「・・・さすがですね・・・」

右手じゃ友好的な態度を示しながら左手にはしっかりと魔力の剣が握られていたりする。つまり、握手をしていたらぐさりとさしていたに違いない。

「握手を求めてきても相手はもしかしたら左手であなたを狙っているかもしれません。今後も気をつけてくださいね」

「・・・疑心暗鬼になるようなことはやめて欲しいなあ・・・」

「さ、今度は大丈夫ですよ。あなたを狙っている人物たちからあなたを守るのが私の役目ですからね。とりあえず姉さんのところに案内してください」

この危ない女の子の姉がセレネならばそれはそれで納得行くような気がする。うん、この少女は間違いなくあの妹さんに違いない。

「あゝわかった。じゃ、とりあえず俺の家に行くからついてきてくれないか？」

「わかりました。それではいきましょう」

こうして俺とセレンは歩き出したのだった。

「姉さんはどうですか？」

歩き出して数分、彼女はするように尋ねてきた。

「どういう意味だ？」

「同居しているというのは聞いたんですけど、どのような生活をおくっているんですか？」

「同居って・・・まあ、そうだろうけど・・・」

悩んでいる俺に彼女は身を乗り出してきて俺の顔を覗き込む。

「甘い生活ですか？この前、姉さんから電話があっただんですけどとても嬉しそうでしたよ？」

「何かしたかな？俺？」

「朝とか起こしてもらっているんですか？」

「ま、まあ・・・」

セレネが起こしてくれるから結構遅刻などはなくなったのだが・

・まあ、それはいいや。

俺がそう考えているとセレンは小難しそうな顔をしながら

「・・・むう、これは脈ありのようですけど・・・まだまだですね。とりあえず姉さんにかんばってもらわないと・・・」

そんなことを呟いていたのだった。

「ただいまあ」

「おじやまします」

二人して家に帰ってきたのだが、家の中には誰もいないのか静かだった。

「・・・鍵をかけずに外出は危ないことにも気がつかないのか？大体だな、そんなことをしても泥棒さんだけが喜ぶんだぞ？鍵は閉めるためにあるんだ」

「いや、泥棒さんから見たら鍵は破るためにあるんですよ？」

「・・・それはいいや。とりあえずなかに入ってくれ」

セレンを中にあげて俺はお茶をセレンの前に出したのだった。彼女はお茶菓子をおいしそうに食べてお茶を品なく一気飲みして湯飲みを

「がちゃん」と置くと俺のほうを見てこう尋ねたのだった。

「・・・私の部屋はどこですか？」

「・・・は？」

「私の部屋です。あなたを助けるためにいるんですから場所をいただかないと・・・ああ、押入れの上とか屋根の上とかは駄目ですよ？きちんとした部屋が欲しいですね」

お茶菓子が齒の間に詰まったのか知らないが、爪楊枝を口に入れている。

「・・・お前、ここに止まるのか？」

「ええ、駄目だといつても私は住み着きますよ？家の前で猫にえさをあげると猫は何度もその家に来ます。それと一緒にですよ」

そういつてにやりと笑った女の子に俺はため息をつきながら電話を取り出したのだった。

「あ、もしもし母さん？あのー非常に申し上げにくいことなんだけど・・・ほら、セレネが家に下宿してるでしょ？明日からその妹さんがきていいかどうかたずねているんだけど・・・あ、食費とかは自分で出すそうだからさ・・・どうかな？あゝいいの？本当にいいの？普通はここでおかしいって思わない？え、娘が出来たようであれしいだつて？・・・とりあえず、家に帰ってきて詳しく話すよ」

そこまで言つて俺は電話を切つたのだった。

「どうでした？」

せんべいをかじっている小娘を見下ろしながら俺は苦虫を噛み潰したような表情を見せた。そして、考えた。

「なぜだ？何故俺の母さんたちはこのものかわからない人物をこゝうもあつさりと止めるんだ？」

「それはどう考えても姉さんが築き上げてきた信頼が大きいんだと思いますよ？どうです？この家で姉さんは何かしているんじゃないんですか？」

俺はセレンにそういわれて考えてみる。

「そうだな・・・それはあるかもしれん。夕食はセレネだし、俺の弁当を作ってくれているのもセレネだ。洗濯物は俺が取り込んでくれるけどセレネのほうがかんばってるな」

「そうでしょうね。どうです？姉さんは既にこの家の住人といっても過言ではない・・・」

「いや、お前も既にこの家の住人だろうがよ？」

「・・・た、確かに下宿人というのはそんなものでしょうね。と、とにかく！あなたは姉さんがいないと既に何も出来ないのではないんですか？」

セレネがいなくなったら・・・どうなるだろう？

「そうだな、セレネがいなくなったら・・・」

「ただいまあ！零時、セレンに会えた？」

俺は元気よく帰ってきたセレネをちよつと眺めて・・・

「あゝおかえり。どうだった？」

「どうだったも何も・・・角が生えてたよ」

「赤い角か？赤い角つけて三倍のスピードでやってきたのか？」

「いや、もつとすごかったよ！中央に赤い角で左右に鬼の角が生えてた！」

興奮しているセレネにセレンは咳払いした。

「ごほん！姉さん、久しぶりです」

「あ・・・セレン・・・久しぶり」

「さ、零時さん姉さんもいるんですし・・・先ほどの続きを言ったらどうですか？」

「言うも何も・・・何を言うんだ？」

俺はそういつてしらばくれて逃げた。どこに？二階だ。それ以外に考えられんからな。セレネの顔を見て喜ぶ自分がいるのは事実なのだが、それはそういう感情ではないはずだ。

「まったく、恥ずかしがり屋なんですね」

「？」

一階には不思議がるセレネとため息をはくセレンが残されていた

のだった。

その夜、俺は外で頭を冷やしていた。知恵熱である。

「……予測できない人物が来たな……」

呟き、夜空を俺は仰いだ。あの二人は今頃仲良くお風呂にでも入っているだろう。

「……はあ、古代魔法ねえ……」

「古代魔法がどうかしたのかしら？」

「！」

その場から飛びすさみ、声のしたほうをにらみつける。

「誰だ？」

「誰？そうね、レルファルと覚えておいてちょうだい。あなたが剣山零時よね？」

「そうだが？それがどうかしたか？」

さて、どうしたもののだろうか？黒いフードをかぶっているところを見るとこれは『古代魔法振興会』のものだと思うのだが……セレネからは

「この地域ではそこまで衝突が起こってないわ」とか言ってたが？

「私と一緒に来てくれないかしら？」

「何故？」

「簡単なことよ、優秀な後輩を見つけては部活に勧誘する先輩と同じような心境ね。あなたのその非常に強い力は『古代魔法振興会』をもうちよつと活発にすることが出来るのよ。勿論、あなたにもそれ相応の場所が与えられることでしょうね」

それに対する俺の答えは……

「はっ、どうせ嘘に決まってるあ！『気をつけよう、甘い言葉ときれいな姉ちゃん』絶対に罠だと言い切ってみせる！」

そう断言すると相手はちよつと驚いたような表情を見せた。

「あらら、そういわれるとは思わなかったわ。まあ、罠でもなんでもないことは覚えておいて欲しいの。お近づきのしるしにこれを・

・
」

「おいおい、俺がもので釣られる男とでも思っているのか？」

「この黄金のねじを・・・」

「・・・ただこう・・・まあ、『古代魔法振興会』も別に悪い組織ってわけじゃないからな」

「じゃ、私はこれで・・・あ、それと・・・」

さらに近づいてきた相手が俺を抱きしめた・・・その事実気づいた俺は当然のように驚いた。

「な、何を！」

「牽制って思つといて・・・じゃあね」

レルフアルはそういつて俺から離れ、消えた。そして、俺の目にはいなくなつた彼女の向こうに・・・

「セ、セレネ！？」

「れ、零時の馬鹿あ！何よ、あの女は！もう知らない！」

「ちよつと、ちよつと！待ってくれよ！」

走り出したセレネを俺は追いかけないといけなかったのだった。しかし、追いつけないのは単に俺が足が遅いだけなのだろうか？

「はくしよい！」

家から閉め出された（否、追いつけなかった）俺に待っていたのは寒い夜だった。今日は空気が澄んでいるのか普段よりもお星様が俺の頭上であざ笑うかのように光っている。

「・・・夜風つてこんなに体に染みるんだな・・・」

鼻水をすすりながら俺は体を動かすことにしたのだが・・・どうにも、寒いと何もやる気が起こらなかった。

「ふふつ、寒そうね？」

「・・・レルフアルか？」

「名前を覚えてもらつてて光栄だわ」

いや、まあ・・・あつてまだ三時間ほどしかたっていないので忘れる馬鹿はいないと思うのだが？

「何かようか？」

暖かそうなコートを睨み付けながら俺は家の前に立っているレルファルに警戒する。

「そんなに寒いのなら私のコートを貸してあげましょうか？大丈夫、私厚着してるから・・・どうかしら？」

「そうか？それならお言葉に甘えて・・・」

俺はレルファルの目の前に立って震える右手をまるで天使のようなレルファルに差し出したのだった。

「あら・・・あなた自身が冷えているのならコートを着ても意味がないんじゃない？」

「根性で暖かくするからいい」

「それより・・・ほら、これなら暖かいでしょう？」

「・・・」

俺は黙るしかなかった。なぜなら、彼女は俺を抱きしめたからだ。三時間前にあったばかりの女性に抱きしめられるとはまったく思わなかった・・・いやいや、そういえば三時間前もこんなことがあって・・・

「・・・零時、そんなに私に見せ付けたいの？」

魔王の声が後ろからしたような気がした。いや、気のせいに違いない。殺気を感じた瞬間、俺の首根っこがつかまれ、後ろに引っ張られた。そのまま地面にぶつかるかと思ったのだが、なんだか柔らかな感触が後頭部にあたった。

「せ、セレネ？」

「・・・あなた、私の弟子にちょっかいを出さないでもらいたいのだけど？」

頭の上のほうから声がしているので俺が今いる位置は・・・いや、考えないようにしよう。今はそういうことを考えている場合ではない。

「・・・ちょっかい？何を言っているのかしら？これは正式な取引よ」

「取引？そんな方法で何を・・・」

「方法も何も、あなたが方法と思っている状況を作り出したのはあなたよ？あなたが剣山零時を家の中に入れてあげていればこんな状況になっっていなかったと私は思うわ？ま、そうしたとしてももっとすごい状況になっっていたかもしれないけどね」

そうやって含み笑いをしている相手にセレネはカチンと来たのか指を鳴らした。右手で俺を思いっきり引き寄せて左手には炎が現れていた。

「・・・さつさと帰つてよ」

「そ〜ね〜今日のところはあなたに免じて帰つてあげるわ。じゃ、剣山零時・・・私はどんなことがあってもあなたを見捨てないわ。それだけは覚えておいてね」

そういつて彼女は闇をまといつて消えたのだった。

「・・・反省してる？」

「・・・はい、してます」

残された俺たち二人・・・夜空の真下で俺は頭を下げていた。

「・・・まあ、今回は多めに見てあげるけど・・・」

「しかし、よくよく考えてみたら何故俺はセレネにここまで言われるんだ？」

「何かいった？」

「いえ、それは師匠の空耳かと・・・」

「さ、家の中に入るわよ。あゝあ、体が冷えちゃった」

セレネは俺の手を引いて家の中に入ったのだった。玄関の電気は既に消えており、俺がつけようとするとセレネはその手を制して俺を抱きしめたのだった。

「！」

「・・・」

何も言わないセレネのせいで俺はおかしくなるかと思った。今まで冷え切っていた体に何故か熱が帯びてきて・・・顔なんか真っ

赤だろっ。

「・・・零時、これで寒くないでしょう？」

「あ、ああ・・・」

「ま、まあ・・・私も暖かくなれたし、さっさと寝るわよ。明日も学校があるからね！」

俺はそういつて足早に去っていったセレネの後を間抜けのように追いかけたのだった。

次の日、俺は何故か俺の隣で寝ていたセレンに尋ねたのだった。

「・・・おいおい、何で俺の隣で寝てんだ？こんなところをまた見られたら・・・」

「大丈夫ですよ。これは姉さんが私に言ったことですからね」

「本当かよ？」

「本当ですよ」

そんなやり取りをしているとセレネがやってきた。

「・・・零時、何してるの？」

「何してるのって言うてるぞ、お前の姉ちゃん」

「・・・節操ないのね？そんなにこの世に未練が無いのかしら？」

「なあ、俺はお前の姉ちゃんが魔王に見えてきたんだが・・・これいかに？」

「・・・私が来たときは手もつけなかつたくせに・・・」

「病院連れて行ったほうがいいんじゃないのか？俺の目には赤黒く見えるぞ、お前の姉ちゃん・・・」

「姉さんも朝から元気いっぱいでいいことですな」

朝っぱらからごめんこうむりたい残虐ファイトの後、俺はセレンに事情を説明してもらった。

「・・・確かにそういつたけど誰も隣で寝てとはいってないわ！」

「え、違うの？」

「違う！それなら私が・・・じゃなくて！セレンが守るといつてくれたから私はてつきり部屋の前にいるかと思つたのよ！」

「でも、零時さん寝てる時私を抱きしめてくれたよ？」

「零時い！」

「寝てたんだ！寝ていたんだあゝぎゃあああああああ！！！！！」

なんだかおかしい連中も加わってきたようなのだが、俺は昨日の夜見せてくれたセレネの一面を大切にしたいと思った。

「・・・セレネ、落ち着け！その一面は俺には必要ない！笑って、笑って？」

「笑えないんじゃないああ！！！」

はつきり言うが、セレネの妹は危険人物だ。

（後書き）

どうも、作者の雨月です。今回現れたセレンですが、先に言っておくとこの人物は連載のほうの新しい話でメインヒロインとして登場させたいと思っています。まあ、それがどうなるかはまだわかりませんがね。では、感想などをよろしくお願いします。作者でメッセージをくれた方にはメッセージを送ります。読者の方はよくわからないので連載のほうで大々的に？お礼を述べたいと思います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8293c/>

ご注文は？～魔法使いで！～ シーズン2

2010年10月8日15時45分発行